

# 北欧諸国の教育の現状～社会保障からみたノルウェー王国、スウェーデン王国の教育現場の実態～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿濱, 茂樹, 田井, 志保里 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2498">http://hdl.handle.net/2297/2498</a>

## 北欧諸国の教育の現状

～社会保障からみたノルウェー王国、スウェーデン王国の教育現場の実態～

### Education of Scandinavian Countries

～ The actual conditions of Education in King of Norway and King of Sweden ～

阿濱茂樹

田井志保里

Shigeki AHAMA

Shihori TAI

#### 【概要】

北欧に位置するノルウェー王国とスウェーデン王国の就学前教育から高等教育までの間に行なわれている教育の現状について報告する。特に、情報教育の観点から現地見学および聞き取り調査に基づきノルウェー王国とスウェーデン王国における実態を報告する。

【キーワード】 ノルウェー王国， スウェーデン王国， 教育制度， 情報教育， 社会保障制度

#### 1. ノルウェー王国

##### 1.1 ノルウェー王国の概要

ノルウェー王国（以下ノルウェー）の市民生活は貧富の差があまり見られず、安定しているという印象を受ける。これは国家の定める社会保障によって、国民の生活を守っていることだと考えられる。そのため、国家財政を保つため、高税率が生じている。消費税は25%（食品などは15%）、所得税は50%である。EUに加入しないことを決め、より一層の独立した国家運営の傾向が見られる。

##### 1.2 教育制度

義務教育が7歳から始まり、初等教育6年間、前期中等教育3年間、後期中等教育3年間、高等教育3～4年間というのが最も標準的なノルウェーでの教育課程である（後期中等教育は専攻するコースによって就学年数が異なってくる場合もある）。しかし、現在ノルウェーでは子どもたちの学力低下が問題となっており、2006年度からコミューンによっては独自に6歳から義務教育とし、就学を始めるという政策が試験

的に始まる予定である。

##### 1.3 就学前教育（保育園教育）

就学前の教育としてコミューンが運営をしている保育園がある。保育園に通うための費用は国やコミューンが負担するため一切かからない。ノルウェー王国は共働きの率が高く、就学前の幼児を生後すぐに預かってくれるところがほとんどである。また、社会保障制度で育児に関する就業時間を短縮したり、フレックスタイム制を取れるようになってきているため、午後5時くらいではほとんどの子どもが親と一緒に帰宅をしている。

##### 1.3 初等教育（小学校教育）

ノルウェーでの初等教育は7歳から12歳までの6年間行なわれる。コミューンによって管理運営をされている公立学校ではあるが、学校制度は国で統一されており、各学校は国の定めたカリキュラムを使うことが義務付けられている。地域によって、指導方法の差が生じないための配慮である。

本報告では、Finnsnessの「Trollvik Skole」

という小学校について紹介する。この小学校では6歳から12歳までの児童120人、教師が25名（常勤18名、非常勤7名）いる。ノルウェーの小学校では基本的には1クラス1人の教師で授業を行なっているが、低学年のクラスでは2人の教師がついて授業を行なっている。教師は学校ごとに雇われているため、本人が希望しない限り転勤はない。また、クラス担任も6年間の持ち上がりで、入学から卒業までは1人もしくは2人の教師が担当する。そのため、教師と生徒の関係、教師と保護者との意志の疎通も深く、問題があった場合でも、迅速対応できるという特徴がある。

低学年のクラス（1～4年）は児童15人程度で、ほぼすべての授業で教師が2人いる。1人は教壇に立ち、授業を進め、もう1人は児童のケアや授業準備を中心に行なっていた。低学年には高学年とは別に特別な時間配分で授業が進められていた。低学年の授業時間数を表1に示す。また、授業風景を図1に示す。

表1 低学年の履修教科と授業時間数

学年	1	2	3	4
ノルウェー語	8	8	8	6
生活	1.5	1.5	2	2
数学	3	5	4	4
社会	1	1	1	2
美術・図工	1	1	2	2
理科	1	1	1	1
英語	0.5	0.5	0.5	1
音楽	1	1	1	1
家庭	0	0	0	1
体育	1.5	1.5	1.5	1.5
自由時間	3.5	1.5	1	0.5
合計時間数	22	22	22	22

高学年（5年～6年）のクラス編成は約15人から20人1クラスであった。ノルウェーでの小学校教育では日本とは違い、毎週時間割が教師によって組まれることになっている。つまり、日本では月曜日から金曜日までの時間割が半年も



図1 小学校の授業の様子

しくは1年間同じであるのに対して、ノルウェーでは毎週、どの教科を学習するのかは教師が児童の学習の進み具合によって組み合わせている。日本のように1時限ごとに教科が変わるのではなく、午前中は算数に集中するなどの時間割に工夫が見られる。

毎週金曜日に児童一人ひとりに次週の時間割表が配られ、その表には教科だけではなく、宿題や持ち物も書いてあるため、保護者も児童の学習の進み具合が一目でわかるようになっている。高学年の授業時間数を表2に示す。

表2 高学年の履修教科と授業時間数

学年	5	6	7
ノルウェー語	5	5	5.5
生活	2	2	3
数学	3.5	3.5	4.5
社会	2.5	2	3
美術・図工	3	3	4
理科	2	2.5	2
英語	2	2	3
音楽	2	2	2
家庭	0	3	0
体育	2	2	3
自由時間	0	0	0
合計時間数	24	27	30

また、小学校では児童全員で週に1回、半日を利用し、学外に出て学年を超えて活動する場合もある。

#### 1.4 前期中等教育（中学校教育）

ノルウェーにおける前期中等教育は初等教育に引き続き、13歳から16歳までの3年間行なわれる。ここまでが義務教育であるが、ほとんどの生徒が高等学校へ進学する。

#### 1.5 後期中等教育（高等学校教育）

小学校、中学校の義務教育終了後、ほとんどの生徒は高等学校に進学する。社会保障の整備が整っているため、就学に関する費用はまったくかからない。そのため、家庭の経済状況が左右されることはなく、生徒が進学をしたければ進学ができる環境が整っている。

本報告では「Finnfjordbotn」、  
「Stangnes」という2つの高等学校について紹介をする。

「Finnfjordbotn」は、北部の町Finnsnessの中心部からやや南に位置し、近隣の村や町の生徒たちが通っている。ノルウェーでは、コミューン単位に高等学校を設立しており、多くは自宅に近い高等学校に進学する。もしくは、自分の進みたいコースを選択する場合もある。多くのコミューンでは通学に3キロ以上かかる生徒には無料のスクールバスが運行している。約半分の生徒がこのスクールバスを利用して通学している。もう半分は両親が送り迎えをすることもあり、各家庭によって、違いが見られる。ノルウェー王国の高等学校の授業時間は昼食時間の30分を含め、朝の8時から夕方2時半までの50分授業の7コマの授業で行なっているところが多い。学年によって授業数が異なるため、1,2年次にはほぼフルタイムに授業があるが、3年次になると、大学進学に関係ある科目だけを習得するという事になっている。

授業では、1年ごとの修得単位が決まられており、必修科目と選択科目の2つからなっている。科目一覧表は表3に示す。

高等学校での必修科目は、ノルウェー語（国

語）、数学、化学、物理、である。3年次になると大学進学のため、以下のような科目の履修が可能になる。また、ノルウェーでの教育の特徴としてあげられるのは、グループワークが多いことである。すべての科目に対して必ずグループで作業を行い、発表することが多い。ITを活用した経済の授業の様子を図2に示す。

この高等学校における情報の授業は主にビジネスの授業の一環として行なわれている。ビジネスの授業では会計計算や統計の処理の際にエクセルを使用している。また、その他の科目でもコンピュータを活用した授業は積極的に行なわれており、ノルウェーの教育では情報という授業を特別には行なわず、それぞれの科目の授業を行なう際、授業理解を手助けする1つの手段として使われている。

また、高等学校では生徒が自由にコンピュータを使用する機会として、図書館にコンピュータが備え付けられている。図書館の情報センターの様子を図3に示す。

ここでは、生徒一人ひとり自分のアカウントを持ち、学校のネットワークに入り、授業での調べ物やメールチェックに使用されていた。

もう1つの「Stangnes」は、Harshtadというコミューンの高等学校である。ここは、前述した「Finnfjordbotn」とは違った性質を持っている。ここでは、美容師、自動車整備士などの専門職のための基礎を学ぶ科目がほとんどである。普通の高等学校では3年間で単位を修得し、卒業後、就職や進学することが多いが、ここでは、2年～3年（インターンシップを含めると4年）で技術を身につけるための内容を含む単位が多く組み込まれたカリキュラムになっている。現在、ノルウェーでは失業率が高く、20代の就職難が社会的問題になっている。多くの移民や難民が入ってきていることがその原因の1つであると思われる。そのため、早い段階から手に職をつけるという傾向がここ近年高く、職業高校を希望する生徒数は年々上昇傾向にある。

表3 高等学校における履修教科・科目

教科・科目	
ノルウェー語	必修
数学	必修
経済	必修
科学	必修
化学	必修
地理	必修
英語	必修
体育	必修(学習内容は選択)
IT(経済学)	必修
社会学	必修
メディア論	必修
第2言語	選択必修
スペイン語	
ドイツ語	
フランス語	
ギリシャ語	
Home Class	必修

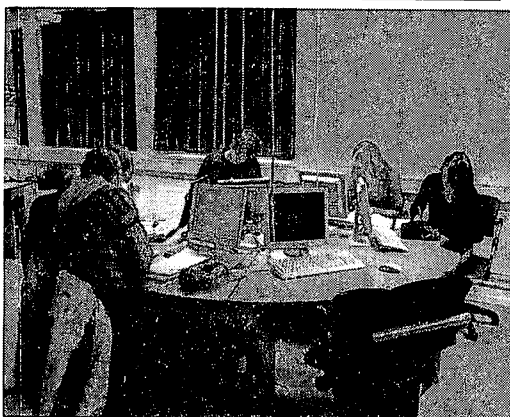


図2 高校の授業の風景

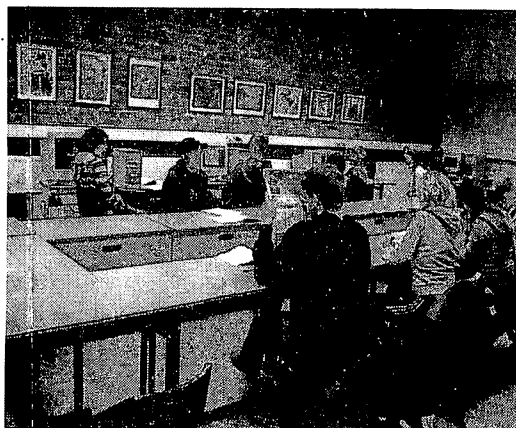


図3 図書館の様子

## 1.6 インターネット事情

ノルウェーは隣国に情報先進国であるフィンランドがあるため、ITに関しては進展国の1つとして位置づけられている。Internet indicators: Hosts, Users and Number of PCsの調べでは、ノルウェーのインターネットの普及率は2004年では39.9%で、世界でも10位以内に入る。2000年以前は5位以内に入るIT先進国として位置づけられていた。

初等・中等教育の現場においては家庭でのインターネット普及率が高いことから、児童生徒にグループで調べさせたりするなどのITを活用しての学習を積極的に行なっている。初等、前期中等教育での現場におけるインターネットの普及率も高い。しかし、ハード的な問題やモラル面での指導への問題も抱えており、今後の教育政策への不安も見られる。

## 2. スウェーデン王国

### 2.1 スウェーデン王国の概要

スウェーデン王国(以下スウェーデン)は世界でも福祉政策の進んだ国で有名である。国民が十分な国の手当てを受けて生活している。生まれたときから、死ぬまで政府がサポートし、不安のない生活を送ることが可能である。

また、スウェーデンは少子化、高齢社会に対する政策も世界に先駆けて行なった。その理由として、スウェーデンは少子化社会、高齢化社会を世界的に最も早く迎えたということが考えられる。社会政策のために高税金を導入した。しかし、少子化のため労働力不足が起こり、その解決策として女性の社会進出が積極的に行われている。

### 2.2 教育制度

スウェーデンにおいて教育にかかる経費はすべて無料である。それは、現在も適用されている。義務教育はもちろんであるが、保育園、高等学校、大学に関しても学費は必要ない。義務教育では学費はもちろんのこと、給食、教科書、授業に必要なノート、文具までも無料で配

られる。

また、成人教育に関しても基本的に学費は必要ない。スウェーデンはこの成人教育に関しても進んでおり、大学、大学院で再び学び直すことが容易にできる。再度、高等教育に入学する際、仕事をやめたり、転居する必要が生じるが、大学・大学院に入る場合は、大学の管理する独身用住居、世帯用住居などの設備は充実している。また、生活費に関しても失業手当を受け取りながら、大学・大学院に入学することで、奨学金や低金利の教育ローンを組むことができるようになってきている。そのため、仕事をやめても一定の収入があるため、大学・大学院で勉強することに対する金銭的困難はないと思われる。

## 2. 3就学前教育1 (保育園)

スウェーデンでは生まれてまもない乳児でも保育園に預けることができる。両親が共に働いている家庭が多いため、保育園の整備も十分に整っている。保育時間は7時から17時半ごろまでである。スウェーデンでの就労はフレックス制であるため、特に朝早くに預けにくる人が多いという。

スウェーデンの保育園では、1998年より保育園が働く親のための施設という位置づけから、子どもが学ぶための施設という考えに変わり、担当管轄も社会福祉省から文部省に変更された。そのため、学ぶためのカリキュラム開発が行われた。

スウェーデンでは1990年代に保育や教育に関する改革が行なわれ、大きく変わった点は2つある。1点目は、それまでは保育園あたりに対して支払われていたが、現在は幼児一人に対して支払われるようになったことであった。保育園の規模はコミュンによって異なるため、財源不足の保育園が増加し、満足いく保育が行なわれないようになったためであった。

2点目は、保育内容に関する改善であった。それまでは、園内などの施設内での保育が中心であったが、自然の中で遊び、活動するこ

とが幼児にとって最も大切なことであるということが学術的に証明され、多くの保育園では外で行なう活動が増加した点であった。

スウェーデンの保育園には施設によって異なるが、特徴的なのは施設の作りである。施設内は普通の家のようにいくつもの小さな部屋に別れ、日本の公立保育園の印象とは違う。小さな部屋にはいろいろな用途があり、絵本を聞く部屋、昼寝をする部屋、ご飯を食べる部屋などに細かく分かれている。

## 2.4就学前教育2 (6歳教育)

スウェーデンは小学校に入る前の1年間、学校に入る準備段階として7歳から通う小学校にて、教育を受けられる制度がある。この制度の目的は、児童が早期に小学校生活に慣れて、7歳から小学校に正式の通うときになったら、すぐに雰囲気になれるためというように記されている。

しかし、実際の教育現場ではいろいろと問題視されている。1つ目は、6歳教育の指導に当たっているのは、学校の教師ではなく、保育士が行なっているためである。スウェーデンでは学校教員になるための課程と、保育士になるための課程が違い、学習内容も異なる点が多い。そのため、同じ学校において、6歳児のクラスと、小学校1年生の7歳児のいるクラスで多く指導内容が違っているため、児童にとって良い影響とは言い難い点も見受けられる。また、児童だけでなく、教員と保育士との間でも意見の相違がある。

現在、この制度は義務教育ではなく、両親、保護者が望まなければ、6歳教育を受ける必要はないとされている。

## 2.5初等教育・前期教育(小学校・中学校教育)

スウェーデンでは7歳から15歳までの9年間は基礎学校と呼ばれ、義務教育になっている。これは、小学校6年間と中学校3年間を合わせたものになっている。この9年間は特に区別はされてはおらず、7歳から9歳の初めの3年間を「初等学年」、10歳から12歳の3年間を「中級学

年」，最後の3年間を「上級学年」としている。

基礎学校の初めの3年である「初等学年」では，主に学校に慣れることや，集団生活を行なうことに意義があると考えられており，テーマ別学習やグループ活動が主な授業のスタイルである。初等学年での3年間はテストもなく，成績表もなく，その代わりに，児童の生活に対する評価やコメントの書かれたものが両親，保護者に渡される。

「中級学年」では5年生時に国内統一テストが行なわれる。これが児童にとっての初めてのテストになる。スウェーデン教育の特徴として，すべての学習段階で職場体験を課している。これは，児童が職に対して真剣に考え，義務教育後の進路，進学を見据えてのものとなっている。スウェーデンでは義務教育後は両親，保護者から精神的にも，生計的にも独立し，社会に出るという意識が非常に高いため，早い段階から自立心や独立心を養っている。

上級学年になると，進学も見据え，児童生徒自身の将来への進路，進学に対しての意識も高まってくる。高等学校進学に関しては中級学年，高等学年の毎日の生活態度や成績が反映されるため，特に試験などで緊張した雰囲気はないが，自分の進路，進学に関しての興味が強くなる。

## 2.6 後期初等教育（高等学校）

基礎学校9年間で終了した後に，多くの生徒たちは後期初等教育である高等学校に進学をする。本報告ではストックホルムにある2つの高等学校を紹介する。ストックホルム中心街に位置する「Kungsholmens Gymnasium」と，ストックホルムの中心街より少し南に位置する「Viktor Rydberg Gymnasium」である。どちらも修学期間は16歳から18歳までの3年間である。

スウェーデンの高等学校への入学するための制度は，受験制度をとっている日本とは違い，義務教育の基礎学校において取った成績によっ

て，入ることのできる高等学校が決まる。

「Kungsholmens Gymnasium」は，ストックホルムで最も古い高等学校として知られている。また，この学校は国立のインターナショナルスクールである（スウェーデンにはアメリカ資本の完全なる私立のインターナショナルスクールも存在するが，こことはまったく性質が異なる）。スウェーデンでは，高等学校の目的として大学進学もしくは，就職を最優先に掲げているため，基礎科目の必修は国で決められているが，その他には，自分が興味関心の教科，科目を選択し，授業を受けるというシステムである。「Kungsholmens Gymnasium」は，国立のインターナショナルスクールであるため，若干他の高等学校とは異なっている。ここでは，コースが「国際学」，「自然科学」，「社会学」の3つがある。「国際学」コースでは，すべての授業が英語で行なわれている。授業の様子を図4，5に示す。

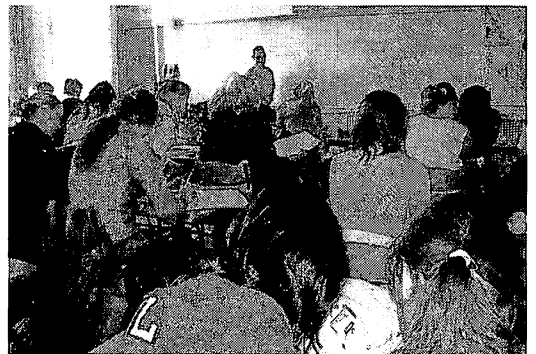


図4 授業の様子

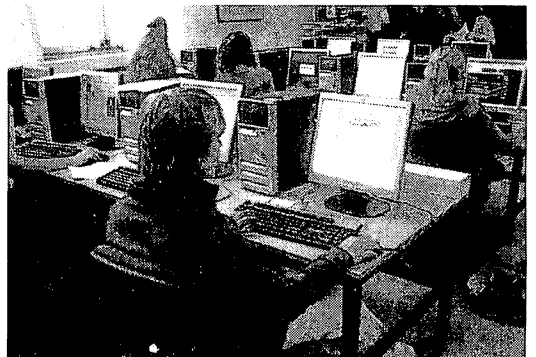


図5 授業の様子

同じくストックホルムの「Viktor Rydberg Gymnasium」は普通のレベルの高等学校である。ここでは、まず入学時に文系と理系のコースを選び、それに沿って、教科や科目を履修し

ていく。教科および科目は表4に示す。

この高等学校では規定の単位を修得する卒業後できるシステムになっており、日本とまったく変わりはない。

表4 高等学校の履修教科・科目

自然科学コース		社会学コース	
スウェーデン語A	必修	スウェーデン語A	必修
スウェーデン語B	必修	スウェーデン語B	必修
(第2言語としての)		(第2言語としての)	
スウェーデン語A	必修	スウェーデン語A	必修
スウェーデン語B	必修	スウェーデン語B	必修
英語A	必修	英語A	必修
数学A	必修	数学A	必修
保健体育A	必修	保健体育A	必修
市民論(社会学)A	必修	市民論(社会学)A	必修
宗教学A	必修	宗教学A	必修
科学A	必修	科学A	必修
美術学	必修	美術学A	必修
以下はコースごとの選択必修		以下はコースごとの選択必修	
生態学		英語B	
物理学		哲学A	
歴史		地理学A	
数学B		歴史A	
数学C	選択必修	数学B	
情報科学		多言語	選択必修
数学(個別)		科学B	
化学		心理学A	
環境学		スウェーデン語C	
		政治学	
		経済A,B	
		法学	
		異文化学	

## 2.7 インターネット事情

スウェーデンは隣国にIT先進国であるフィンランドの影響から、早い時期において家庭生活や学校ではITが導入されていた。

学校教育に関してみれば、世界的に早い段階から生徒がインターネットを利用できる環境が整備され、授業においても積極的にインター

ネットを活用した授業が行なわれている。現在でもインターネットにつながっているパソコンは1つの教室に1台から2台置かれ、また校内のパソコンも児童・生徒は自由に使うことができるようになっている。特に図書館での利用状況はよく、図書館が情報検索・収集の場所としての位置づけが定着されている。また、スウェー

デンではテーマ別学習が多いため、グループで行なう際にインターネットやコンピュータを活用しやすい学習環境も整備されている。

また、家庭にもインターネットは普及されているため、児童生徒は幼いときからコンピュータやインターネットに触れる機会が多いと思われる。

高等教育である大学では、大学構内にはいたるところにコンピュータが設置され、生徒が自由に利用できる環境が整っている。また、すべての大学では大学入学者に対して大学が運営を行なっている寮（有料）を提供することが多い。そこでは大学のネットワークの末端を使用することができ、寮にいながらにして、大学ネットワークが使用できる。このように自由な環境を備えるスウェーデンの大学では、管理をととも厳しく行なっている。もし、IDやパスワードを紛失、盗難された場合は、いかなる理由でも1ヶ月の学内ネットワークの使用が禁止される。取得する際にも、何か問題を起こした場合や、大学に不利益と思われる使用した場合は、法的手段をとるという誓約書にサインを求められる。スウェーデンでは高等学校卒業後は、親から独立したものとして扱われるため、得られた権利に対しての責任を取ることが求められる。

スウェーデンの主要都市の街中にはインターネットカフェがあり、自動販売機にお金と入れ、チケットを受け取る。そこには、ログイン用のパスワードが書かれ、そのパスワードを使い、店内に常設されているコンピュータを使用するという形をとっている。

### 3.まとめ

本報告ではノルウェー、スウェーデンの教育の現状について情報教育の立場から述べた。ノルウェー、スウェーデンの両国は世界に先駆けて積極的に情報を活用した授業を行なっている。特に、小学校、中学校段階では各教科のグループで行う調べ学習を通じて、ITを活用し

て情報検索・収集の方法を学ぶだけでなく、プレゼンテーションなどの発表スキルなども学んでいる。また、情報操作能力だけでなく、情報の活用方法も学ぶ姿勢が見られる。高校では小学校、中学校に学習したことを生かしながら、専門的に科学的に情報を学ぶとともに、経済学や社会学などの科目において、情報を問題解決のツールとして、利活用できる能力の育成を行なっている。

情報倫理や情報モラルに関しては、学校で行なうよりも、家庭教育の一環として指導されている傾向にある。なぜなら、多くの家庭にすでにインターネットにつながったコンピュータがあり、幼児期からインターネットのある生活を行なっている。そのため、家庭での教育として位置づけられている。

以上のように、情報先進国であるノルウェー、スウェーデンの2両国と日本とでは学校教育の中での情報教育の位置づけは多くの点で異なっている。しかし、日本よりも早い段階で情報教育を取り入れた学習活動を行なっているため、学ぶべきところが多くあると思われる。

### 参考文献

- 1) 文部科学省：新「情報教育に関する手引」  
2004
- 2) ノルウェー・オフィシャルサイト  
<http://www.norway.info/>
- 3) 在日ノルウェー大使館  
<http://www.norway.or.jp/>
- 4) Information from the Government and Ministries  
<http://odin.dep.no/odin/english/bn.html>
- 5) ITU, International Telecommunication Union (国際電気通信連合)  
<http://www.itu.int/home/index.html>
- 6) スウェーデン政府  
<http://www.sweden.gov.se/>

7) スウェーデン大使館

[http://www.swedenabroad.com/  
pages/start\\_4324.asp](http://www.swedenabroad.com/pages/start_4324.asp)

8) スウェーデン教育省

<http://www.skolverket.se/>

9) スウェーデン移民局

<http://www.migrationsverket.se/>

10) 二文字理明, 伊藤正純: 「スウェーデンにみる個性重視社会」, 桜井書店2002